論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

報　告　番　号	甲　第　1037　号	氏　　名	福　嶋　敏　郎
論 文 審 査 担 当 者	主　査　　本　田　孝　行 副　査　　伊　藤　研　一・野　見　山　哲　生		

（論文審査の結果の要旨）

小細胞肺癌は、進展が速く遠隔転移をきたしやすいため、早期発見例は少なく、自覚症状での発見例が多い。そのため、検診の有効性は乏しいと言われている。本研究では、当施設にて入院治療を行った小細胞肺癌症例を、発見動機別に後方視的にその臨床的特徴と予後を解析した。

2000 年から 2011 年の間に当施設で治療された小細胞肺癌患者 147 例を対象とした。対象者を発見動機別に、自覚症状なしで CT 撮影（CT 群 24 例）か胸部 X 線（X 線群 37 例）で発見された患者、自覚症状で発見された患者（症状群 86 例）の 3 群に分類し、それぞれの臨床的特徴や予後を後方視的に解析した。生存分析は Kaplan–Meier 法で行った。

その結果、福嶋敏郎は次の結論を得た。

1. TNM 分類に基づく病期別では、症状群に比し、CT 群およびX線群で、病期Ⅰ、Ⅱの早期病期の症例が多く認められる傾向にはあったが、3 群間で統計学的に有意な分布の偏りは認められなかった。
2. 小細胞肺癌の臨床的病期分類の限局型と進展型で分類すると、CT 群およびX線群は症状群に比し限局型の割合が、症状群に比し有意に高かった。
3. 限局型のなかでもより早期で手術適応であった手術施行例は、CT 群で症状群に比し有意に多かった。
4. CT 群および X 線群の生存期間はそれぞれ症状群に比し統計学的に有意に延長していることが示された。
5. CT 群とX線群の生存期間には、統計学的有意差は認められなかった。

これらの結果より、CT ないしは X 線を含む胸部画像検査で発見された小細胞肺癌患者は、症状で発見された患者よりも、明らかにより限局型の頻度が高く長期生存期間を示すことが示唆された。よって、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。